

研究題目	戦後のシカゴにおける日本音楽の活動と発展:戦前との比較分析を通じて	報告書作成者	安納 真理子
研究従事者	安納 真理子		
研究目的	<p>米国シカゴには多くの日本人や日系人が住んでおり、日本音楽や芸能のグループも多い。現在は、太鼓、三味線、箏、日本舞踊等のグループが活動している。しかし、1945年に創刊されて以来日系人の活動を取り上げている新聞『シカゴ新報』からは、1960年代には日本の芸能、宗教団体や県人会の活動が今以上に活発だったことが窺える。たとえば1960年元旦の『シカゴ新報』には、詩吟、琵琶、謡曲グループ等から新年の挨拶が寄せられている。第二次世界大戦後に強制収容所から解放された2万人が、戦前は400人の日系人しかいなかったシカゴに移住してから結成したこれらのグループの活動は、シカゴの社会に大きな影響を与えたと考えられる。</p> <p>本研究は、戦後のシカゴに移住した日系人が、どのような日本芸能・音楽のグループを結成し、日系人コミュニティとそこでの日本芸能・音楽の伝承にいかに関与を及ぼしたのかについて、資料とインタビュー調査を通じて追究することを目的とした。</p> <p>これまでシカゴへは多くの日系人が移住したにも拘わらず、シカゴにおける日本音楽の活動の記録は、人気太鼓グループの演奏者青木タツ氏に関する論文一本のみである。シカゴ生まれでシカゴ育ちの日系二世であり、現在でも音楽関係者とのネットワークを持つ申請者が、自身の多様な文化的・音楽的背景と語学力を活かしながら本研究を進めることで、シカゴの日本音楽活動の経緯と展開を明らかにできると考えた。また、シカゴの日系人は多様な地域から集まった移民であるため、本研究では移民文化としてのシカゴの日本音楽が持つハイブリディティについても考察した。</p>		

研究内容	<p>本研究は、シカゴの日系人のインタビュー調査と、1945年から現在までに継続されている日系人活動が書かれている新聞『シカゴ新報』の音楽活動の記事や宣伝を通して、当時どのような日本音楽・芸能のグループが成立していたかを調査し、これらの音楽活動が継続されているのか、あるいは絶えているのかを明らかにした。さらに、シカゴ日系人会が発行した『シカゴ日系人史』(1968年)と『シカゴ日系百年史』(1986年)、Japanese American Service Committee (JASC、定住者会)のLegacy Centerに所蔵されている日系人の資料や遺品、日系人の自伝や記憶等も参照しながらシカゴの歴史や活動について調査した。『シカゴ新報』によると、この時代はシカゴで詩吟が盛んであり、観水流詩吟錦友會・坪内澄水師範の門下による演奏会がシカゴで行われた記録がJASCにある。しかしこのグループは、坪内澄水氏で絶えてしまい、坪内澄水氏の稽古や伝承方法について知る人がいないため、インタビュー調査はできなかった。多くのシカゴのグループは、創立者や日系一世の人々で絶えてしまい、創立者がどこで、どのように日本の音楽・芸能を学んだかを辿るのが難しい。つまり、日本で学んだのか、強制収容所で学んだのか、強制収容所に入れられる前に米国の西部で技法を取得したのかを明らかにできるような資料や発言を収集する必要がある。</p> <p>本研究は具体的に、1962年にシカゴにおいての二つの出来事に焦点を当てることができた。それは、①若柳流師範・若柳司友氏が夫・内本忠氏のサポートで実現させた「司友会」の結成と、②浄土宗佛教會の無垢品在眞氏による、日本音楽やニュースを届ける「さくら放送」の開始である。</p> <p>①「司友会」は1962年に始まり、45年間で47人の名取、6人の師範を育てている。司友氏とその最後の弟子の若柳流師範・若柳郁友氏へのインタビュー、そして二年に一度行われた演奏会のプログラムの考察を通して、「司友会」の活動や、司友氏が舞踊を通じて次の世代に何を伝えたかったのかを明らかにした。さらに「司友会」は、シカゴの太鼓の世界にも大きく寄与している。「司友会」の稽古場から「若太鼓グループ」として始まり、1998年に若柳司友氏の「司」を取って結成されたシカゴで人気の「司太鼓」は、現在も青木タツ氏の指導の下で活動している。</p> <p>②「さくら放送」は、無垢品氏によって1962年から15年間続けられた日本語の放送が発端となった。この放送は、日系一世に日本の音楽を聴かせて心の安らぎを与えようという思いから始められた。無垢品氏の息子によると、氏は輸入レコードが高いのにも拘わらず、日本から送ってもらい、妻に選曲をしてもらっていたという。また1966年から1971年まで英語で日本文化紹介を担当したアナウンサーは、当時のプログラムやレコードを見せながら、宮城道雄や美空ひばりが人気だったことを語ってくれた。並行して、強制収容所からシカゴに移住した日系人二世の多くが在住する退職者ホーム「平和テラス」を拠点としてインタビュー調査を行い、当時の音楽環境について確認した。特に「さくら放送」というシカゴの日本音楽のラジオ番組が始まった経緯や聴取層について、その選曲担当者の遺族や放送を聴いていた人々から話を聞き、資料調査で検証した。</p>
------	--

研究のポイント	<p>本研究で戦後にシカゴに移住した日本人や日系人のオーラル・ヒストリーを記録することにより、45年間も続いてきた「司友会」の舞踊の発表会や、毎年日本食スーパー「ミツワ」で行われる盆踊りの「炭坑節」等が、日系人にとって改めて自分のアイデンティティと向き合う機会になっていたことを明らかにした。トマス・トゥリノによると、音楽、踊り、祭りや公的文化表現は、社会的集団を形成し維持するのに不可欠な集団的アイデンティティを表現する主な方法であり、それ故に芸術は人間の進化と生存に必要なものと言われてきた(Turino 2008)。「司友会」の舞踊の発表会や盆踊りは、戦争による人種的差別があった時代、また戦後シカゴに日系人が集まるのが好まれなかった時代に、日系人が同じような背景の人々と自分たちの文化を表現し、コミュニティを一体化することを促したと考える。さらにこれらの日本文化に関する催しは、親と自分たちのルーツについて語るときでもあり、日系人としてのアイデンティティを再認識する機会ともなった。そのため本研究は、日本音楽・芸能の団体が日系人コミュニティに与えた影響を明らかにした。</p>
研究結果	<p>1940年のイリノイ州の国勢調査によると、日本人・日系人の数は462人に上る(Nishi 1963)。戦前シカゴの日系人に関するデイ・多佳子の研究によると、日本の舞踊や音楽を実践していた Michitaro Ongawa という日系人がシカゴに住んでいて、1910年から1930年までショトーカ運動で巡回していたようだ。しかし戦前シカゴでは、日本音楽・芸能はあまり盛んではなく、戦後の日系人の移住によって現在のコミュニティができたと考えられる。本研究で存在を確認できたシカゴの日本音楽・芸能団体は、次の通りである。太鼓が5つ、日本舞踊が2つ(「司友会」も含む)、その他には三味線、三線、箏グループ等がある。シカゴで活発に活動している団体は大きく4つある。それは、JASCに所属している2つのグループ(青木タツ氏の「司太鼓」と藤間流・藤間秀之丞氏の日本舞踊「秀舞会」と、Midwest Buddhist Temple(浄土真宗西本願寺派・中西部仏教会)に所属している「法悦太鼓」と、箏と尺八で演奏される箏グループである。イリノイ州シカゴは米国の中中部にあるため、カリフォルニア州やニューヨーク州と異なり、日本から音楽や芸能の団体が訪れる機会が少なく、カリフォルニア州と比べると日本人や日系人の人口も少ない。日系人が集まる「リトル・トーキョー」や「ジャパントウン」等もないが、その中で日本の音楽・芸能を継承する団体や夏祭りが続いてきた。「司友会」は日本文化を次世代に継承し、また「さくら放送」は日系一世と彼らの故郷を繋ぎ、辛い過去や現状を乗り越える力を与えていたようだ。本研究を通して、これらの歴史的な出来事がどのように今のシカゴ日系人社会を作り上げたかについて認識することは、日系人が経験した苦難を忘れないことにつながると考える。</p>
今後の課題	<p>今後の課題として、シカゴにおける日系人の文化、日本の音楽や伝統芸能について解明したことを広く共有したい。具体的には、日本移民学会の第28回年次大会(南山大学、2018年6月24日)と、東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院の第7回ILA研究会(2018年5月31日)で発表した内容を纏めて、日本移民学会の学会誌『移民研究年報』に論文として投稿したい。そして本研究の内容は、シカゴの資料収集したJASCのLegacy Centerや、Chicago Japanese Club(シカゴ日本人会)、日本文化について研究する大学・機関や「平和テラス」のような施設で発表する予定を組んでいる。また、本研究でインタビューしたシカゴの日本音楽・芸能のグループの活動内容を改めて整理し、今回は扱えなかったグループの歴史や活動についてもさらなる調査を進めたい。司友氏の弟子の一人にインタビューできたが、他の弟子にもインタビューし、司友氏の伝承方法や弟子の活動について調べ、司友氏の遺産がどのように継承されているかを追究したい。今後も成果は日本と米国で発表し、日本文化を次世代に継承しようとする日系人の活動に対して、研究を通じて貢献したい。</p>

【左】若柳司友
(参考文献:リサイタル・プログラム 1982、39 頁)



【中央】司友会の名取披露(1985年9月21日-22日)
(参考文献:リサイタル・プログラム 1985、表表紙)



【右】『シカゴ新報』(1945年11月15日)
(JASCより提供)



(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)